

文學の體系

園 賴 三

具體的現實的に、吾々が文學と考へてゐるのは、小説であり、戯曲であり、又詩であるが、それらのものは、各々文學の本質を具現しつつ、相異なる形象を擁して、互に對立し、補足しつつ、相寄りて文學の全容を示してゐるが、この實情に照して考ふるに、繪畫や彫刻に於けるよりも、文學の中には、より一層、その *Character* の分岐が顯著であり、各々文學の類型を形づくり、文學一般の中に對等の位置を要求してゐることが容易に看取しえられる。従つて、彫刻の中に木彫、青銅像、大理石像などが各自の彫刻的特性を表示する状態に較べて、かゝる物的素材や技術の點より由來することなしに、文學のうちには内部的發生的に、一つの系列組織が包含されてゐることが察せられる。又、繪畫の中に、*マレライ* と *ツアイヒスング* といふ二つの種類があると見る見方に較べて、戯曲や詩の文學類型の認識は、自明的である。前者の場合では、繪畫に於ける二つの主要素であり、若くは方面であるところのものを以つて、獨立せる一個の藝術形態と見做さんとする

牽強附會を免れないのに反し、後者にありて、戯曲や詩は文學を各自それぞれ形態化し具現したものであつて、實際に於て、文學はこれら形象を通してのみ現れるその點を有りの儘に認めたのである。而して、このやうに文學がこれら文學的形象の種類別を通してのみ具體的現實的に現はれる事情は、文學自體が一つの體系を包藏せることを示す。

文學自體に内在する體系は、一方に於て、各文學類型を産出せしめ、他方に於て、それを統一するものである。吾々は、この體系について、以下少しく考察をめぐらさうと思ふ。そして、試論的な見解を述べて識者の叱正を仰ぎたいと思ふ。

文學の類型を産出する原因として、作者の人生觀や社會觀を擧げる人がある。それで、樂天的文學とか、厭世的文學とかが數へられたり、社會主義文學とか、共產主義文學とかが唱へられ、而して、それが文學の種類わけであると思惟されてゐる。

併し乍ら、これは高々、文學の内容に種別を賦與したのに過ぎなくて、決してそれは文學的形象の種類を發生せしめる原因ではありえない。

これと同様に、ロマンチズムやリアリズムなどの文學思潮傾向に、文學の類型別

を産出する力はない。

文學の類型を産出する原因は、これ以外の點に存すると見なければならぬ。藝術に就いての根本的見解として先づ吾々は *Idee* の *Gestalt* の説を擧げてよい。實際に筆を執り若くは言葉を操りつゝある際に、作のイデエが明亮となる場合も尠くはないであらう。が、さりとて、文學はイデエなくして現はれるものとは思はれない。只漫然と筆を執り若くは言葉を操るといふが、實はさうさせるものが背後にあつて働きかけてゐる。そのものは、未だ充分に意識化されてゐなくとも、存在しないのではない。併し一方に於て、イデエがあればそれで充分だとは言へない。イデエは形^{グスタ}成^{ルデン}されなければならぬ。然らざれば藝術とは言はれない。現實的に藝術として自身を示すものは、この形象^{グスタルト}に外ならないのである。

イデエと形象は、藝術成立の根本的な本質關係であつて、近時の文學研究が實地に、作家や作品について此方面の事柄を闡明することに努めるのも頷れやう。

文學の類型は、イデエによつて産出されるものと見るならば、それは、恐らく前に掲げた作者の人生觀や社會觀を文學類型の産出原因として擧げた人と、餘り違はない程度で、見當違ひであらう。イデエは作の内容的方面に寄與する一面に於て、可なり

自由に、その特色を發揮しうるものであつて、文學的イデエたる以上は形象を求めて具體化しなければならぬにせよ、その方面に於ては、直接文學の類型を規定する力を持たない。イデエの立場としては、たゞそれが具體化さればよいのであつて、どの文學類型でなければならぬと言ふことはない。

二

Ideeは、内容の豊富さと、そのために陥り易い混沌とに禍されて、抽象的、不確定的に流れ易い。Gestaltは、形態に固着して、只だ單に外形のみを擁立する生氣なき Formelと墮し易い。

しかし乍ら、これは Idee の Gestalt とを充分な有機的統一關係のもとに置いて見なかつた結果である。藝術創作の實際にありては、Idee と Gestalt とは、緊密につながつてゐるのである。Idee と Gestalt とを繋ぐものは、Motivである。創作に際してこのモチーフが旺盛に活動する。

イデエが作家のこゝろに宿るや、その氣稟や個性によつて影響される。そして、それと共に、イデエをば實際的に方向づけるイデエの自己規定の作用が現はれる。それは、イデエの發展であるが、イデエの發展は、混沌より自己を救ひ、抽象より具象へ、動

向の錯綜して不確定的なるを整理し、一定の方向へ導き、動機づけることによつて爲される。モチーフはイデエの自己規定でありその展開の姿相である。

モチーフには作家精神の類型に應じて變容する一面もあるが、モチーフの種類とその發動の方法の相違は、直接言語の取扱ひ方と關連して、文學の類型を規定する力を持つてゐる。

言葉と言ふものは、その生ける姿に於ては、それぞれの述べ方語り方に結び付いてゐる。言葉の藝術たる文學は、この述べ方や語り方に關連せずして存在する筈はない。

言葉の述べ方や語る方法に種類のあることは事實である。そして、それが文學に *Gestalt* を賦與することに與つて力あるのは言ふ迄もない。

しかし、言葉の述べ方、そのみにして文學の類型を産出する原因たりうるであらうか。そのやうに見るのは明かに認識不足である。言葉の述べ方といふものは、イデエから直接支配されねばならぬことはない。たゞ、イデエが實現の上で力點づけられたとき、言葉の述べ方が考慮に上る。即ち、モチーフとなつて、直接言葉の述べ方を支配する力を持つやうになる。

かくして、文學の類型を産出する原因として、吾々はモチーフに重要な機能の存することを認めなければならぬのである。モチーフの種類とその發動方法の相違は、想像の種々なるものを呼び起し、若くは種々なる想像に結び付く。想像は、モチーフによつて呼出され、若くはモチーフに結付く一面があると共に、他面に於て、想像はモチーフを驅使する。蓋し、モチーフは、文學的想像のために心的素材として取扱はれる一面があるからである。

而して、このやうにモチーフと緊密な關係にある想像の種類わけは、文學類型別を産出する原因たりうるのである。

モチーフは又感情を呼出し、若くは感情に結付く。モチーフの種類とその發動の方法に應じて、呼出され、結付く感情には、種々の状態や種類がありうる。さうして、かくモチーフと密接な關係にある感情の種々なる状態や種類はまた、文學の類型別を産出する原因たりうるのである。

三

モチーフはイデエの自己規定である。イデエが一定の方向に向つて自身を誘導し展開し行く、状態がモチーフである。イデエが方向づけられたもの、それが即ちモ

チーフである。

而して、その方向づけは、要するに三つに括約される。謂はば、それは one dimensional, two dimensional, three dimensional と名づけて然るべきものであらうと思ふ。

元より、イデエは精神的のものであるから、物理的に、若くは有形的物質的に、^{ダイメン}方位關係を指定しえられるものではないが、^{シヨウ}文學的イデエたる以上は、必ず形象へ化生しなければならず、イデエは形態を胎生すべき性質を内具するものであつて、自身それに向つて先づ、方向づけに於て自己規定の状態を取れるモチーフとしては、^{ダイメン}方位關係によつて自己を闡明することは、差しつかへあらう筈はない。

有りていに言へば、モチーフの種々相を捉へるのに、この^{ダイメン}方位關係を以つてすることは、便利であり且つ明亮さを期待しえられる。

而して、一方位、二方位、三方位の三つに括約しえられるモチーフの方向づけよりして、モチーフそのものをこの三つに括約することが能きと思ふ。方位關係をモチーフの上に使用するのには、物理界とは違つた用途であつて、謂はゞ比喩的な用法である。

それ故、モチーフの種類ヲ一方位的、モチーフ、二方位的、モチーフ、三方位的、モチーフ

の三つとしてこゝに掲げることにする。これらモチーフの種類別は、モチーフをその方向づけの根本的分ちかたに基いて區分したものであつて、たゞ漫然と任意に立てた區分ではない。モチーフはその方向づけよりすれば、この三つの種類に括約される外はないのである。さうして、この三つの種類別は、モチーフの根本的な三つの發動方法を指示するものであり、モチーフの三つの基本態を指示するものである。

扱、モチーフが發動して動くところに、若くは動いたあとに、印しづけられ若くは形づくられるものを、比喩的な表示を以つてするならば、一方位的モチーフは一つの方向に動き、線の形状を取る。二方位的モチーフは二つの方向に向ひ、線の展開となつて現はれ、面の状態をつくる。三方位的モチーフは三つの方向に動き、面の展開として立體の状態を示す。この比喩的表示は、モチーフの三つの基本態について吾々に明確な理解を與へるに役立つであらう。

モチーフの中には、はげしく動いて激越な趣を呈し、而もナイーブにして、情緒の自然に従ひ、direct to heart に動き、謂はゞ線の形状を取つて流動するものがある。この流動し動く方向は認めうるけれど、その形や姿は明らかでない。一方位的モチーフ

即ちこの種類にぞくする。憧憬や愛などを代表者とする亢進せる心情はこの中に數へられやう。總じて一方位的モチーフの産出するものは抒情詩である。

一方位的モチーフは、感動の純なる状態より現はれたゞ感動そのもののみを荷つてゐる。然るに、今一つの方位を加へて二方位的モチーフとなると、感動的事件や事情を荷ふ力が生じ、前のモチーフの場合では臚ろげであつた形や姿が浮び出でる。内界に蝨く一方位的モチーフの浮動状態は、一定の場處づけを得、周囲の關係が明かとなり、謂はゞ面の状態を取り、この二方位的モチーフとなつて、對象性や客觀性が顯現する。二方位的モチーフは叙事詩を産出する。

感動の一方位的な端的な流露は抒情詩をつくり、感動を二方位的な世界に移して叙べたものは叙事詩である。前者に示される一方位的な方向は、主觀性を取るに適し、後者に於ては、一方向的な主觀性が反省せられて客觀性を示すに適はしい。それと同時に、抒情詩に於ける感動の端的な、すばやい自然的流露は、叙事詩に於ては抑制され緩徐となり、迂餘曲折を経てはじめて現はれることゝなる。

感動そのものを吐露する快感は、抒情詩の持つ特權である。が、叙事詩にありてこの快感は事柄を述べる興味へ轉じる。叙事詩にありてはモチーフが展開し、前後左

右に向つて動き、周圍の事情や事件や人物の關係を持ち出すことが肝要である。物語るには、筋が必要である。既に二方位的であることはモチーフの複雑化を意味し且つ形成的であることをば意味する。

一方位的モチーフは直接な表現によつて實現される。二方位的モチーフの爲めには、直接的表現の一段展開し複雑化したる形成を必要とする。而して、モチーフには今一つの種類たる三方位的のものがある。

三方位的モチーフは、モチーフの展開の展開であり、謂はゞそれは立體の態を取る。筋は二方位的モチーフの場合よりも、一層肝要となり、一層形成的となり、具體化する人物の活躍を待たなければならぬ。これ戯曲である。三方位的モチーフは戯曲を産出する。

戯曲と叙事詩は、これらの點に於て、抒情詩に對立し、展開の法則や統一の法則に従はねばならない。叙事詩——小説に描寫される人間や對象は、環境や事情のもとに動き、それに即しており、繪畫がその畫面の中に對象を現出せしめてゐると同様の状態、即ち二方位的な状態を脱却しえざる關係にある。

劇の人物は、實際に活動し動作する。それは物語や小説の人物よりも、より廣く可

能な動機づけが施されてゐるからであつて、それによつて立體化し人物化し物語を實行する状態に達したのである。かくして、劇は事件を現在化しうると共に、その人物は、考へ、感じ、欲する人間そのものとなる。

叙事詩的モチーフの客觀的特質に、更に抒情詩的モチーフの主觀性を加へ、劇的モチーフは、客觀的、主觀的状态に到達する。

二方位的モチーフは對象の客觀化を得意とするが、それは對象を面上に場處づけることであり、環境のうちに位置を指定することである。三方位的となつて、一方位的モチーフの流動状態が復活して、人物は實際に行動し動作し、事件は劇的に展開する。これ戯曲の世界である。

四

イデエの自己規定たるモチーフは、イデエを働きへ動機づけるものと見られる。

モチーフとは普通、繪畫の製作に於てかの畫因と呼ばれて人に知られてゐるものが、それであり、文學創作にありてもモチーフは作因とも云ふべきものであるが、文學の場合に於ては美術の場合よりも、人生、人間性、人間生活により、一層密接なる關係を有し、文學的イデエは人生の源泉より掬み取られるものであるが故に、この場合、イデエに

方向づけることは、動機づけることである。

この動機づけの種々相は、又、モチーフの種類を生せしめる。内部に叢り湧き返へるイデエへ端的に、個人的な導線パーソナルをさし入れると、イデエは直ちに旺盛と奔り出でる。その状態は直情徑行的である。これパーソナルな動機づけである。

かゝる動機づけをなすモチーフは、内部に叢り湧き返へるイデエを流出させる上に特色を示すものであつて、これによつて心情や情緒的方面が美事にひき出される。動機づけることは、イデエをひき出し解釋しうる状態に置くことであるが、パーソナルな動機づけは、主觀的たるを免れないものであつて、主觀的解釋を下すことになるであらう。

これを他人に了解せしめる上に於て、パーソナルな動機づけの不利であることは言ふ迄もない。他人に首肯させるには、インパーソナルな動機づけでなくてはならない。

インパーソナルに動機づけることによつて、内部のイデエを確定させ、凝固させ、連絡づけ、それによつて對象性を現前せしめることが能きる。パーソナルな動機づけが心情の流露を得意とするに反し、インパーソナルな動機づけは、事件や行爲を展開

させることを自己の任務とする。

心情の自由な流露は、主觀的であつて然るべく、事件や行爲の展開には、客觀性が必要である。その客觀性はインパーソナルな動機づけによつて贏ち得られる。

インパーソナルな動機づけにも、その程度や目標に應じて區分がある。インパーソナルな動機づけによつて、對象性をば只だ單に現前せしめることを以つて満足するもの、即ち言換へて、眞實なりと見ゆる程度の緊張を以つて、人間の行爲や事件が周圍との交渉の上に確定され、ば満足するものと、この状態より更に一段人間の行爲や事件が強度化せられ、即ち、より、廣く深く動機づけられ、反對に周圍は從屬的位置に引おろされ、人間行爲や事件の舞臺と化するものと、この兩者に區分せられる。

このやうに見ると、動機づけの仕かたは三通りに分れる。さうして、それが、かの方角づけの基本的區分の三つと合致するのである。

パーソナルな動機づけは一方位的モチーフであり、インパーソナルな動機づけは二方位的並に三方位的モチーフである。(以下次號)